

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	柿本 雅美（奈良県）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第98号
学位授与の日付	平成30年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条第1項
学 位 論 文 題 目	「家の名」をめぐる民俗学的研究
論 文 審 査 委 員	主査 八木 透（佛教大学教授） 副査 鈴木 文子（佛教大学教授） 副査 安井 眞奈美 （国際日本文化研究センター教授）

〔1〕論文の概要

柿本雅美氏の博士の学位請求論文である『“家の名”をめぐる民俗学的研究』は、屋号・通名・苗字を「家の名」という概念で捉え、相互の関係性や個人名との関わりを分析することにより、「家の名」が地域社会の中でどのように位置づけられるのかについて、家意識の問題を交えながら考察した論考である。屋号・苗字・通名は相互に深い関係性を有しながら成り立ってきたにも関わらず、これまでは個別に研究が行われ、さらに近世から近代への連続性を視野に入れた研究がほとんど見られなかった点を問題視し、これらの相互関係性を総体的に捉え、広義の視座から分析を試みた斬新で意欲的な研究である。

本論文の目次構成は以下の通りである。

序 論

第1章 「家の名」をめぐる研究

第1節 屋号研究とその問題点

第2節 「家の名」の名付けと祖名継承法の研究

第3節 家研究と家意識

第2章 「家の名」の成立と変遷

はじめに

第1節 近江における屋号の地域的特徴

第2節 通名と祖名屋号の成立

第3節 近代以前期における名前の変革

第4節 屋号と苗字

小 括

第3章 「家の名」の生成と継承

はじめに

第1節 屋号継承の方法

第2節 屋号生成の要因

第3節 生み出される屋号の特徴

第4節 生み出され続けた屋号

小 括

第4章 「家の名」の名付けと家意識

はじめに

第1節 近世における「家の名」の名付け

第2節 明治初期の「家の名」の名付け

第3節 近代から現代における「家の名」の名付け

第4節 「家の名」の名付けの背景にあるもの

小 括

結 語

補論1 『奈良県風俗誌』にみる子どもの名付け

はじめに

第1節 名付けの意味

第2節 名付けと俗信

第3節 檜神社と名付け

おわりに

補論2 白髭神社のなるこ参り

はじめに

第1節 なるこ参りについて

第2節 近世におけるなるこ参り

第3節 名前の習俗となるこ参り

おわりに

参考文献一覧

初出一覧

史料編

- 1、 知内区有文書「成人別附留覚書」
- 2、 知内区有文書「烏帽子着帳」
- 3、 知内区有文書「烏帽子割合帳」

柿本雅美氏は論文の「序論」において、本研究の意義と目的について次のように述べる。すなわち「本論の目的は、屋号、通名、苗字を「家の名」として捉え、それぞれの関係性や個人名との関わりを分析することにより、「家の名」が地域社会の中でどのように意味づけされるのか、家意識の問題を交えながら考察することにある」。さらに研究の具体的な方法について「本論では、屋号が地域社会の中でどのように意味づけされるのか探っ

ていきたい。そのためにまず、屋号が地域社会のなかでどのように展開されてきたのかを明らかにするため、近世から近代、そして現代という長い時間軸のなかで屋号と同等の働きを有する通名、苗字との関わりから考察し、屋号の実態について分析していく」と述べ、屋号と同等の機能を有すると考えられる「通名」や「苗字」との相互関連性を重視して分析を試みるという研究の視座を明確に示している。

第一章「「家の名」をめぐる研究」では、これまでの屋号をめぐる先行研究を整理して課題設定を行っている。屋号の成立について集落内に同苗字の家が多いため、これを区別するために成立したという曖昧な説明がなされてきたことを問題視しつつ、出生時の命名によって屋号と同じ個人名を持つ人、屋号に因む個人名を持つ人が少なからずおり、個人名に屋号が取り入れられている。その代表が祖名継承法による名付けであることを踏まえ、祖名継承研究の研究史の整理と課題の抽出を行っている。

第二章「「家の名」の成立と変遷」では、屋号と通名、苗字の関係性について取り上げている。屋号は地域によってさまざまな種類があり、また地域によってもその性格は異なるため、まず屋号の地域的特徴を明らかにするため、近江の高島市マキノ町知内、甲賀市土山町大河原、愛荘町杣掛という、性格の異なる3地域を事例として取り上げながら、屋号の詳細な分類を行っている。

第三章「「家の名」の生成と継承」では、甲賀市土山町大河原を事例に取り上げながら、明治以降に苗字が使用され始めたにも関わらず、新たに生み出された屋号について考察を行っている。さらに近代において屋号は如何にして生み出されたのかについても考察を試み、近代以降に生み出された屋号の特徴を明らかにしている。また、近代になっても屋号が生み出され続けた要因についても分析を試みている。

第四章「「家の名」の名付けと家意識」では、「家の名」が取り入れられた個人名について考察を試みる。近代になると「家の名」にちなんだ名付けが行われ、このような名付けは、「祖名継承」による名付けと結びつくことを指摘する。また、明治期から現代にいたるまで、家々で行なわれてきた子どもの名付けから、「家の名」の名付けの意味を問い、近代の家意識と「家の名」についても分析を試みる。

「結語」においては、「「家の名」はあくまでも家に対する名前であり、家族に対する名前ではないことから、家の象徴的要素であり、家意識を具体的に表出するものであることは明らかである」と述べ、さらに明治になって成立した屋号や、苗字の公称が許されなかった近世では、「家の名」は通名ひとつであり、それは屋号と「家を示すことのできる個人名」双方の働きを有していたことから、家の内外に対して家意識が表出されていたという。さらに、通名が明治の名前に関する法令によって屋号と「家を示すことのできる個人名」へ別れたことに付随して、家意識が表出される対象も、家の外と内へとそれぞれ分かれることになることとする結論を導いている。

また補論として、ひとつには大正4(1915)年に編さんされた『奈良県風俗誌』から、近代における子どもの名付けについての論考である「「奈良県風俗誌」にみる子どもの名付け」を取り上げ、さらに子どもの名付けをめぐる通過儀礼としての白鬚神社の「なるこ参り」についての論考である「白鬚神社のなるこ参り」を取り上げている。

〔2〕 審査結果の要旨

本論文が日本における屋号・苗字、および個人名や名付けをめぐる研究、さらに家研究の潮流からして、独創的だと思われるのは、基本的に以下の3点においてであると考えられる。

第1点として、柿本氏は屋号・通名・苗字の3者を「家の名」という概念で括り、3者の相互関連性に着目しつつ、総体として分析することによって、地域社会における機能や役割について明らかにせんとした研究視座があげられよう。すなわち、屋号・通名・苗字はそれぞれ関連しながら成り立ってきたにもかかわらず、これまでの民俗学研究においては個別に研究が進められて来たという傾向がうかがえる。このような研究史上の反省に立ち、柿本氏は、3者は地域社会の中で共通の認識を持って家々を区別する名であり、かつ家の系譜を示すことができる名として、広義の視座から総体的な考察を試みている。その結果、地域社会の中で屋号や通名がいかなる機能を有してきたのか、さらに屋号や通名を総体として研究することで、日本の“家”のいかなる特質を浮き彫りにすることができるのかという、民俗学の家研究史において、これまでほとんど明らかにされてこなかった課題に対して大胆な仮説を提示していることは評価に値するといえるだろう。

第2点として、対象とする時代を近世から明治への質的な転換期を挟みつつ、近代・現代にいたる連続性を視野に入れた考察を試みた点にあるといえる。周知の通り、日本では近世期には庶民は苗字を公称することは許されていなかった。そのような中で、人々は通名を用いて家の系譜を表わし、家督相続の際には通名を代々世襲してきた。それが明治に入り、苗字の公称が許されるようになると、苗字の使用と並行して、個人ではなく集落内の家々を区別するための屋号が使用されるようになる。これは近世以来長く使用されてきた通名が変化したものであり、以後苗字と屋号は、現代にいたるまで共存して使用されてきた。このような「家の名」の歴史的変遷に依拠しながら、柿本氏は、屋号の使用は自家や他家に対する家意識を表出するものと捉える。すなわち、屋号は家の成員が抱える自家に対する家意識を対外的に表出するものであると解釈し、分析の結果、家意識を有する主体は“家”であり、また「家の名」を名付けられる家の成員であるとする結論を導いている。

第3点として、「家の名」と個人名との関連性に着目し、実際に個人名に屋号が取り入れられた事例が少なからず見られることを明らかにしている。そしてこのような「家の名」の名づけは、何らかの関係にある先祖の名の一部を子どもに命名するという、いわゆる祖名継承といわれる名付けと結びつくという分析結果を提示している。このような、「家の名」と個人名が深く関わるという事実を明らかにした研究はこれまでほぼ皆無であり、この点は柿本氏の独創的な研究視座であるといえるだろう。さらに祖名継承研究の第一人者である上野和男の学説を丁寧に分析し、上野が提示した祖名継承の一類型としての「父系型祖名継承」を、「名づけ」という視点から再検討することにより、「家の名の名づけ」と「父の名の名づけ」という二種が存在することを指摘している。このような上野の名づけをめぐる研究をさらに発展させた点は、評価に値するものと判断できよう。

次に、審査者が感じた本論文における問題点と課題についても触れておきたい。以下にあげる何点かに関して、今後の十分な検討が必要ではないと思われる。

第1点として、本論文における最重要タームである「屋号」と「通名」という概念が、やや曖昧であるという印象を受けることである。たとえば第1章において柿本氏は「屋号は苗字が使用されるのと同じ時期に（中略）成立する」と述べているが、一方で第2章においては、「祖名屋号の中でも近代以降に誕生した祖名屋号とそれ以外の祖名屋号というふたつに分けることができる」と述べ、屋号はあたかも近世から存在したかのような表現が見られる。さらに「屋号」と「通名」の区別もやや曖昧であるという印象を与える表現が何か所か見られる。このような重要タームの概念のあいまいさの要因は、それぞれのタームの概念規定を明確に行っていないからであろうと思われる。たとえば「通名」という用語については、第4章において初めて明確な概念規定がなされており、もっと早めに概念規定を行っていれば、このような混乱は、多少は回避できたのではないかと思う。今後はこれらの重要タームの生成の時期とその概念について、より厳密な検証が求められるものと思われる。

第2点として、柿本氏がこだわり続ける「家意識」という概念についてである。柿本氏は人類学者の清水昭俊の学説に依拠しつつ、屋号は家の成員が抱える自家に対する家意識を対外的に表出するものであるという理解を提示し、家意識を有する主体は“家”であり、また「家の名」を名付けられる家の成員であるとする結論を導いている。これまできわめて抽象的であり、実体として理解することが困難であった「家意識」という概念を、ある程度実体として提示することはできたものと評価はできるが、しかしなお、「家意識」とは何なのか。さらに日本の“家”とはどのような存在なのか。必ずしも明確に提示できたとは思えない。また「家意識を有する主体は“家”であり・・・」とする表現は、「家」というタームのみを用いて説明しており、これでは「家意識」とは何かについて説明したことにはならず、まったく意味をなさない。今後はさらに多くの先行研究を紐解きつつ、より広義の視座から“家”とは、さらに“家意識”とは何かについて、実証的に考察を試みる必要があるだろう。

さらに、近世から現代にいたる長いタイムスパンの中で、日本人の「家」に対する観念や意識がどのように変遷してきたと考えられるのか、柿本氏は通名や屋号、あるいは子どもの名づけの事例を通して、このテーマに迫れるだけの材料は得たはずであるにもかかわらず、結語においてこの問題に関する記述はほとんど見受けられない。そのことが、結語が舌足らずな印象を与えてしまう主たる要因になっているのではないかと思われる。本研究によって得られた知見を、より明確に示すことが可能であったにもかかわらず、それがうまく成し得なかったことは大きな課題だといえるだろう。

第3点として、論の展開の根拠となる具体事例についてである。本論で示された具体事例は、滋賀県内の高島市マキノ町知内・甲賀市土山町大河原・愛荘町沓掛の3集落であり、これらの集落は確かに異質な特質を有する集落としてふさわしい事例であると思われるが、しかし「家の名」と「家意識」、あるいは「家の名」と子どもの名づけとの相互関連性を普遍的に解明してゆくためには、やはり事例数の少なさと地域的偏りが問題となろう。特に中部から関東、南東北地方においても、屋号を有する集落は数多く存在している。本論で提示された仮説をより説得力ある学説として定着させるためには、今後は対象フィールドをさらに広げて、日本全国を視野に入れた研究を試みる必要があるといえるだろう。

さらに、本論の後に添えられた2本の「補論」の位置づけが明確にされていない点も大

きな問題であろう。これらの補論は本論の内容とどのようにリンクし、補論における問題提起が本論の内容のいかなる箇所を補うことに繋がるのか、その説明が一切ないことは大きな問題である。本論と補論との具体的な関連性について、柿本氏の明確な見解を求めたいと思う。

以上のように、本論文には問題点も少なからず存在する。しかし、総じて斬新な問題意識に基づき、徹底したフィールドワークを行ないつつ、丁寧な考察と分析、および結語における大胆な持論の展開に至るまで、豊かな知見に裏づけされた論考であることは間違いないと思われる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断する。